ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について[1]

宮川　達

0　問題の所在

ベルクソン（Henri Bergson, 1859-1941）は一九一一年にオックスフォード大学でおこなった講演『変化の知覚』*La perception du changement*――『思考と動くもの』*La pensée et le mouvant*(1938)に所収――のなかで、「なぜわれわれは（ターナーやコローの作品のような）ある作品について、それは〝真実だ〟というのでしょうか[2]」と問いかける。彼は、この問いに答えるかたちで「そのような作品がわれわれに示してくれるようなものについて、そのいくばくかのものをわれわれがすでに知覚していた[3]」からだというのだが、その〝いくばくのもの〟は、まさに画家がそのキャンバス上に差し出している画家の知覚そのものにほかならない。そして、その画家について、彼は「自然がその知覚の能力を行動の能力に結び付け忘れた[4]」というのだが、では、この〝自然が行動の能力に結び付け忘れた〟知覚の能力とは、いったいどのような知覚のことをいうのだろう。

われわれがこのことを理解するためには、まず、そもそもベルクソンが知覚をどのように捉えていたのかということから検討してゆく必要があるだろう。われわれは、それゆえここでは、ベルクソン四つの主著のうちのひとつであ

り、知覚と記憶の問題が扱われている著作『物質と記憶』*Matière et mémoire* (1896) から、ベルクソンのいう知覚がどのようなものであるのかを検討していってみたい。

1　『物質と記憶』に描かれる知覚の位置づけと概要

『物質と記憶』において知覚の位置、知覚の規定は、必ずしも明確ではない。純粋知覚と称され、宇宙全体をその総体と称するところのイマージュと同義であるとされるレベルから、おそらく、絶えざる変化である持続を把握する能力、直観にも比すべき能力を射程に収めるレベルまで、この著作のなかでは知覚が幅広く語られている。これらのレベルは、ともすればこの著作のなかで齟齬を来しているかの印象さえ感じさせるほどである。それは、この著作が心身二元論の克服をこそ目論んでいるからであり、その操作上止むを得ず想定される〝理論上〟のそれがふくまれるなどするためであろうし、そもそも、知覚そのものが主題になっていないためであるように思われる。われわれは、これらを注意深く見きわめ、あるいはそれを紡ぎ出すようにしてベルクソンの知覚を明らかにしてゆこうと思う。まずはベルクソンの記述にしたがって、純粋知覚からみてゆくことにしよう。

1-1　純粋知覚

ベルクソンはまず、純粋知覚 la perception pure を想定する。これは、物質そのものと本性上差異のないものと規定される。「物質のこの知覚と、物質そのものとのあいだには、程度の差があるだけで本性の相違はなく、純粋知覚と物質との関係は、部分と全体の関係である。[5]」　ベルクソンがここでこのような純粋知覚を、権利上 en droit であれ想定するのは、まさにそのことによって、心身二元論の克服をはかるからにほかならない。ベルクソンの目論見は、人格、意識をいったん物質＝純粋知覚に還元してしまい、さらに、そのような純粋知覚から〝物質以外のなにものかが付け加わる〟ことなく、精神や人格、意識が現われてくることをみて、物質と精神が別のもの、あるいは相対峙するものではないと差し示すことである。ベルクソンの目論見はここにある。

さてこのような目論見のもと、物質に還元されたわれわ

れは、身体として存してはいても、物質世界の部分以上のなにものでもなく、宇宙の作用・反作用運動における単なる運動の通過点でしかない。他の物質といささかも異なるところがなく、そこには意識はない。なぜなら、そこはあくまでも宇宙の作用・反作用の運動が、ただ必然の法則によって通過してゆく点にすぎないからであり、この作用・反作用の必然法則に対しては、われわれは一切の主導権をもたない。それゆえ、「わたしがわたしの意識に、その意識が感情 l'affection においてわがものと主張する役割について尋ねれば、わたしの意識はこう答える。わたしが主導権をもっていると信じられるすべての運動過程においては、感情 le sentiment もしくは感覚のかたちでそこにあるが、反対に、わたしの活動が自動的になり、もはや意識はいらないと宣言するや、意識は姿を消し、消えてしまうのだ、と」[6]。意識のないたんなる運動の通過点としてのわれわれが、ここでまず想定される。

まず、このことによって、物質と向かい合ってあるように考えられるわれわれが、根底において物質と断絶のあるものではないことが示される。

このような場合、この純粋知覚は、われわれがふつう想定するような像、心象を結ばないとされる。

ただしベルクソンは、このような意味での〝像・心象〟のことを、ここではイマージュ image とは呼ばない。この純粋知覚を論じるあたりで、彼が頻繁に用いるイマージュという語には、自らは常識的な用法といいながら、『物質と記憶』の脈絡に固有の意味が与えられているということをわれわれは忘れてはならないだろう。「物質とは、われわれにとって〝イマージュ〟の総体なのである。そして〝イマージュ〟によって、われわれは、観念論者たちが表象と呼ぶものよりは多いが、実在論者がものと呼ぶものよりは少ない存在――〝もの〟と〝表象〟の中間にある存在――を理解する。このような物質の概念はまったく常識的なそれなのである。[7]」　われわれのうちに生ずる像、心象に先だってあると考えられるのが、まさにベルクソンがここでいうイマージュなのだ。

『物質と記憶』の後半、すでに心身二元論の克服がなされ、むしろ問題が記憶へと移ってゆくにしたがって、このイマージュということばは、われわれが通常用いる〝心象〟としてのイマージュ、つまりたとえば〝知覚心象 l'image-perception〟であるとか、〝記憶心象 l'image-sou-

venir〟といったような用法へと転じてゆくが、物質をも、われわれの意識をもこのイマージュに還元してしまおうという、まさにこの脈絡にかぎっていえば、ベルクソンは、われわれが内的に構築する像をイマージュという語によっては差し示さず、〝表象 la représentation〟という語を用い、これをイマージュといい分けている。ここで生じないといわれるのは、まさにこの像、〝表象 la représentation〟であり、そこに生じるのは感情的感覚 la sensation affective である。イマージュはすでに、つねに、ある。

「……イマージュにとっては〝あること〟と、〝意識的に知覚されていること〟とのあいだには、たんなる程度の違いがあるだけで、本性の相違はないということである。[8]」本性上の相違はないが、しかし「ものごとについてのわれわれの表象は、けっきょく、それらがわれわれの自由にぶつかって反射するということから生まれる[9]」のであって、「物質についてのわれわれの表象は、物体に働きかけるわれわれの可能な行動の尺度である[10]」、あるいは「感覚は現実的作用を含み、知覚は可能的作用を含む[11]」という点において、この二つは区別される。「現前と表象というこのふたつのことばの差は、まさに物質そのものと、それについてわれわれがもつ意識的知覚の隔たりを表わしているように思われる。[12]」　つまりひたすら作用・反作用の必然的な法則に支配されている段階においては、われわれに自由はなく、したがって、そこに表象は生じえない。表象が生じるためには、われわれが、必然的な法則から逃れ、意識的に知覚を生じさせていなくてはならないということである。それゆえ、このような意識的な知覚の生じていない純粋知覚には、像は現われないのである。

ただし、われわれにはここでひとつ注意をしておかなくてはならないことがある。以下でそれを確認しつつ、ベルクソンの理論における純粋知覚をより明らかにしておこう。

純粋知覚には像が生じないというベルクソンの規定は、触覚を射程に置き、これに心象[13]をも想定しようというわれわれの問題意識[14]にとっては、少なからず障害として立ちはだかるかのように思えてしまう。なぜなら、われわれに現実的に生じうる触覚的な知覚とは、まさに対象との距離をもたない状態にこそ生ずると考えられるが、このように対象との距離がない場合は、これは現実的な作用であり、そこに生ずるのは〝特殊な知覚〟なのであり、そこに生ずる

のは感情 l'affection だと断じられるからだ。「知覚される対象からわれわれへの身体を隔てる距離は、かくして、まぎれもなく、危険の切迫の多少、期待の実現の遠近をあらわす尺度である。……しかし、この対象とわれわれの距離が減少するにつれて、いいかえると、危険が切迫し期待が間近になるほど、潜在的作用はますます現実的作用に変わろうとする。いま極限まできて、距離がゼロになる場合、つまり知覚すべき対象がわれわれの身体と一致する場合、いわば、われわれの身体が知覚すべき対象である場合を仮定してみよう。すると、まったく特殊な知覚、まさしく感情がそれによってつくられる特殊な知覚があらわすのは、もはや潜在的作用ではなく現実的作用であろう。[15]」　現実的作用が生じているとき、像は生じない。

たしかに現実的作用ばかりに終始しているとき、とりわけ〝対象とわれわれの距離が減少し危険が切迫し〟ているような状況にあって像が生じないことは認めよう。「過去は物質によって演じられ、精神によって思い浮かべられるのでなくてはならない。[16]」　その意味するところは、物質によって演じられているとき、つまり現実的な作用が働いているとき、精神によって思い浮かべられるもの、像は生じないということである。

では、像が生じないからといって触覚は純粋知覚なのだろうか。それは誤りだ。なぜならば、われわれの触覚が機能している状態が〝事実上 en fait〟の知覚であるのに対し、純粋知覚は、ベルクソンが心身二元論を克服するために〝理論上 en droits〟設定した知覚にすぎないからだ。ベルクソンの思想にあっては、すべてが流動変化する。われわれがそれを一気に捉えることができないのなら、変化の断面を〝理論上〟切り取って、それをひとつひとつ理解してゆくしかない。ベルクソンが純粋知覚を〝理論上〟設定したのは、それゆえであるのだろう。われわれは、このように理論上想定された純粋知覚と、後になって具体的な現象として語られる〝現実的作用が生じている場合〟を混同してはならない。「じっさい、われわれの純粋知覚は、できるだけ速やかであると想定するにしても、持続のある厚みを占めるものであるから、われわれの継起する知覚は、これまで仮定してきたように、ものごとの現実的諸瞬間ではけっしてなくて、われわれの意識の諸瞬間である。……じっさいは、われわれにとって、瞬間的なものはけっして存在しない。われわれがそのような名前で呼ぶもののなか

には、すでにわれわれの記憶力、したがって意識の働きが入ってきているのだ……[17]」　純粋知覚は、事実上はありえないものなのだ。像を結ばないという共通の性質をもちながら、この二つのものは本性的にまったく異なっている。

われわれは〝純粋知覚〟が、あくまでも〝理論上〟のものであるということを忘れずに、この純粋知覚からの論の展開を追うことにしよう。

1-2　純粋知覚からの意識・意識的知覚のたち現われ

前述したとおり、あるいはベルクソン自身が「さしあたり知覚を、具体的で複雑なわたしの知覚、すなわち、わたしの記憶に満たされていつもなんらかの持続の厚みを示す知覚とは理解しないでもらいたい。そうではなくて、純粋知覚、すなわち事実上ではなく権利上存在する知覚と解していただきたいのである[18]」というように、ベルクソンが純粋知覚を想定したのは、あくまでも心身二元論を克服するための操作である。しかし、仮にそれが〝理論上〟のものであったとしても、意識が、この物質のレベルから不自然なく、連続的に生じてくることを差し示せば、意味はない。そこで、ここではこの純粋知覚から意識のたち現われるいきさつをみておくことにしよう。

しかし、このいきさつを説明するにあたって注意しなくてはならないことは「説明すべきことは、知覚がいかにして生まれるかではなく、いかにして自己を限定するかということである[19]」。それまで〝なかった〟ものが〝生ずる〟というのでは、せっかく純粋知覚を用いて一元的な平面を確保したところに、あらたに説明せねばならぬが説明できないなにかを付け加えなくてはならなくなるから[20]である。この一元的平面、すべてがそこに還元される必然的法則の平面、作用・反作用の運動が滞りなく生じている平面に、不確定性 l'indétermination と呼ばれる一種の滞りが生じ、ここに意識がたち現われるとベルクソンはいう。本来、与えられた作用に対して、相応の反作用が生ずるこの有機的連関において、反作用が躊躇される、保留される事態が生ずるというのだ。

その原因について『物質と記憶』は定かには語らないが、神経系の発達がそれを引き起こす[21]と考えていたのだろう。「われわれはそこで、行動そのものと、行動の周囲を包む不確定性とを考察したが、この不確定性は神経系の構造に含まれるもので、神経系は表象のためではなく、むし

ろこの不確定性のためにできているようにみえたのであった。[22]」　ただし、そのようにいうベルクソンの論述は、むしろ不確定性を結果としてではなく、不問の原因として前提しているかのようにさえ思われるが[23]、ここでは、その問題には触れないことにしよう[24]。

いずれにせよ、作用・反作用の必然的法則にのみ還元される物質としてのイマージュの総体のなかに、身体と呼ばれる、ある不確定性の中心が生ずる。「この不確定性がひとたび想定されれば、意識的知覚の可能性はおろか、その必然性すらもそこから引き出すことができないかをさぐってみよう[25]。」　この中心においては、受け取った作用に対する反作用をなすことがためらわれる。このときはじめて表象が、あるいは、われわれが事実上それを認めるところの知覚、意識的知覚がそこに現われるのである。「知覚（意識的知覚）は、物質から受けた興奮が引き続き必然的な反応を呈しなくなったまさにそのときに現われるのだ[26]。」もちろん、ここでいう〝現われる〟というのは、あらたなイマージュが、物質としてのイマージュ以外のものから作られ、生じるということではない。物質そのものとしてのイマージュが、表象としてのイマージュに転じて、この不確定性の中心、運動の中心に、いわば留まるのだ。

のちにみるように、いったん、この不確定性の中心、作用・反作用の必然的な関係を滞らせる中心が生ずると、この中心は、さらに不確定的な要素をつぎつぎに引き込んでゆくことになろう。この不確定性の要素とは、そのようにして行動が留保され、表象に転じてゆく――意識的な――知覚心象にほかならないが、もとをただせば、それが総体として宇宙をなし、あるいは純粋知覚がそれであるといわれたイマージュ、つまり、この運動の中心が生じた平面をなすイマージュの総体である。これはけっしてベルクソンの譬えではないが、われわれは、穏やかに波打ち寄せる大海原に、なにがしかの理由によって、わずかな渦巻きが生じ、そこに海水が引き込まれつつ、大きな渦巻きへと転じてゆく様を、これになぞらえて思い描くとよいのではないかと思われる[27]。宇宙全体を、この大きな海原に譬えるのも、宇宙全体がひとつの大きなうねりであると考えるベルクソンの思想[28]から、あながち外れたものではないだろう。

ここでわれわれがおさえておかなくてはならないであろうことは、やがてここに現われる意識が、物質としてのイマージュとはまったく別もののあらたななにかから生ずる

というのではなく、あくまでも、まさに物質たるところのイマージュから、いわば連続的に生ずるということ、物質と精神、意識は一元的につながっているということである。おそらくベルクソンはこの意識にせよ、あるいはわれわれの事実上の知覚であるにせよ、それを別個に〝ある〟ものとは考えない。それは関係性[29]であり、あるいは可能性にすぎない。

さて、このイマージュの運動の滞りであるところの運動の中心、そして、われわれがここで用いた比喩を使えば、物質としてのイマージュを表象に変えつつ引き込み、それらの表象によって成り立つ渦巻きが、やがて一個の自我として、あるいは人格として成立してゆくことになる。「児童を研究した心理学者がよくしっているように、われわれの表象は非人格的にはじまる。それが、中心としてわれわれの身体をとりいれ、〝われわれの〟表象となるのは、徐々になのであり、帰納の力によってなのである。……わたしの身体が空間を動くにつれ、他のすべての表象は変化するが、反対に、身体はどこまでも変化することがない。かくしてわたしは当然これを中心とせざるをえず、そしてこれらに対し他のイマージュを関係づけることになるだろう。……まずイマージュの総体があるのである。この総体の中に〝行動の中心〟があって、これに対して利害関係のあるイマージュが反射するように見える。このようにして知覚が生まれ、行動が準備されるのである。〝わたしの身体〟とは、これらの知覚の中心にくっきりと現われ出るものなのである。〝わたしの人格〟とは、それに対してこれらの行動が関係づけられねばならない存在である。[30]」

われわれが、くどいほどに確認しておくべきことは〝まずイマージュの総体がある〟ということであり、そのイマージュの総体のなかで、わたしにとって不変のものと、つねに変化するものとの差異が明らかになってくるということであり、そのことが、われわれに〝われわれの身体〟というものの意識を、したがってそこに根拠を持つ〝われわれの人格〟を現わしめるということなのである。イマージュの総体に先だってわれわれの意識、人格があって、そしてそれが知覚を生じるのではなく、まずイマージュの総体があり、ここに行動の留保にともなって滞る表象としてのイマージュ、つまりは意識的な知覚が運動の中心を徐々に形作り、それがわれわれの意識を、われわれの人格を現わしめるのだということなのである。誤解を恐れずにいって

しまえば「〝わたし〟が先にあるのではなく、〝知覚〟が〝わたし〟を作る」のだということさえできるだろう。

さて、先の引用の冒頭には「児童を研究した心理学者がよくしっているように」ということばがみえる。この『物質と記憶』のなかには、もう一箇所、児童の事例が出てくる。「たいていの児童における自然発生的な spontanée 記憶力の異常な発達は、まさに、彼らがまだその記憶力を振る舞いと連携させていないことに由来する。彼らは、ふだん、そのときどきの印象を追うのであって、彼らにあって、行動は記憶の指示に従わないので、ぎゃくに彼らの記憶は行動の必要に制約されない。……知性が発達するにつれての、記憶力の見かけ上の減退は、かくして、行動とむすびつく記憶の増大しつつある組織化に起因する。[31]」本来の脈絡とは違うが、等しく児童の例であるという点にのみ依拠して、ここから意識のたち現われを確認しておこう。

ここでいう自然発生的記憶力は、行動の必要に制御されておらず、行動とは関わりない記憶力と考えられるが、ここでいう行動とは、いわば有意的な行動のことをさすのであって、それはわれわれの自由に関わることである。このような自由な行動と関わらない自然発生的記憶力は、それゆえ、作用・反作用の必然法則に起因しながら、留保されただけの反作用、行動に関わるともいえるだろう。先ほどの渦巻きの譬えにおいて、つぎつぎとこの作用・反作用の運動の滞りの中心に引き込まれてゆく表象と転じたイマージュそのものが、記憶[32]として溜ってゆく。ここでわれわれはそのように〝自然発生的な記憶力〟を読んでおこう。しかし、このような記憶力は、有意的な運動のために制御されるようになる。それが〝知性が発達するにつれての、記憶力の見かけ上の減退〟といわれるところであるが、この〝記憶力の見かけ上の減退〟は、〝それらの記憶、つまり作用・反作用の必然法則に起因しながら、留保されただけの反作用としてのイマージュであるところのものの組織化 l'organisation ...des souvenirs に〟起因するのである。

このような読みによって、あらためて明らかにし、確認したいのは、こういうことだ。われわれの自由な行動、有意的な行動、あるいはそれを可能とする精神の自由、生命の特徴をなす不確定性の中心、あるいはさらに、そのようなものの現われであるところの意識、その具体的な現われであるところの意識的な知覚、それはわれわれの事実上の

知覚であるが、そのようなもののいずれもが、その根拠を、この有意的ならざる行動、作用・反作用の必然法則に従うイマージュの総体の平面にもつのであって、なにかほかのものに起因するのではないということなのである。これらは、いったん滞ると、跡絶えることなく留まり続け、その総体はますます増大してゆく。やがて不変の表象と変化する表象との差異から、不変の表象をみずからの中心とする意識があらわれ、それらがなにがしか――引用に依れば、それは知性ということになるが、これもまたけっしてあらたなものとして付け加わるものではない――の力によって組織化され、有意的な行動を、つまり不確定性に対する選択――ベルクソンはやがて、この不確定性に対する選択の可能性をこそ知覚というだろう――を、つまりは意識を、精神の自由を可能ならしめるのである。

われわれが知覚し、はじめて知覚心象が生ずるのではない。知覚心象がわれわれを作るのである。そしてベルクソンは、表象に転じたイマージュ＝知覚心象が記憶として蓄えられ、他のイマージュとは区別されたイマージュとして意識された運動の中心、そしてそこに不確定性の選択の可能性として自由に働くわれわれの意識を、われわれの人格と呼ぶはずである。「われわれの表象は非人格的にはじまる。……〝わたしの身体〟とは、これらの知覚の中心にくっきりと現われ出るものなのである。〝わたしの人格〟とは、それに対してこれらの行動が関係づけられねばならない存在である。[33]」　「わたしの知覚は、……わたしの身体から他の物体に進むのではない。それはまず、諸物体の総体の中にあり、ついで徐々に自己を限定して、わたしの身体を中心に選びとるのだ。……わたしはまさにこの特殊なイマージュをわたしの宇宙の中心とし、またわたしの人格の物理的基礎とするのである。[34]」　非人格的にはじまったわれわれは、かくして人格をもつようになるのである。

1-3　知覚が人格の根拠である

われわれがここまでみてきたところを簡略にまとめると、こうである。

(1)　純粋知覚は理論上のものである。――ただし、それに近い事実上の知覚もある。それは、現実的な作用をなし、なおかつ、われわれの意識が消えうせ、われわれが自動的もしくは習慣的にその作用をなしているときである。

(2)　純粋知覚は事実上存在しえないとしても、われわれ

の事実上の知覚は、純粋知覚がそれであるといわれるイマージュの総体と断絶することなく、また、そこになにものかが付け加わるということもなく存在する。――純粋知覚が退けられるのは、そこに持続の厚みが考慮されていないからである。

(3) 宇宙全体、イマージュの総体の運動作用の体系のなかに、作用・反作用の運動が滞る点が生じ、それが運動の中心とみずから認識されることによって、そこに意識が、そして人格が現われる。――われわれの意識、人格はイマージュの運動とつながっている。より正確にいえば、イマージュの運動の一部である。

(4) 作用・反作用の運動の滞りによって、そこに表象が現われる。――これがわれわれの事実上の知覚である。しかも、この表象は、イマージュそのものとは別個のものでもなければ、イマージュそのものになにかが付け加わったものでもない。イマージュそのものがなにがしかのものを捨て去ることによって転じたものである。

これらの点からわれわれが際立たせておきたいことは、知覚がわれわれの意識、人格をたち現わせるものなのであるということ、さらにこの知覚は宇宙全体がそうであるようなイマージュの総体から、減少という過程を経て現われたものであるということである。もう少し簡潔にいえば、知覚にこそわれわれの根拠があるということである。

2 知覚と記憶との関係

ここまでのところでは、ベルクソンに倣って記憶についてはとくに言及しないできたが、以下では、この記憶と知覚との関連を明らかにしておくことにしよう。先に引用したように「じっさい、われわれの純粋知覚は、できるだけ速やかであると想定するにしても、持続のある厚みを占めるものであるから、われわれの継起する知覚は、これまで仮定してきたように、ものごとの現実的諸瞬間ではけっしてなくて、われわれの意識の諸瞬間である。……じっさいは、われわれにとって、瞬間的なものはけっして存在しない。われわれがそのような名前で呼ぶもののなかには、すでにわれわれの記憶力、したがって意識の働きが入ってきているのだ……」[35]から。

われわれは、もう一度注意しておこう。ここでは純粋知覚がじっさいには有効ではないことをいっている。他方、

純粋知覚に対置させられる純粋記憶 le souvenir pur も、のちにみるように、それは現実化されなければ無力なままである。ベルクソンはこの純粋知覚と純粋記憶とのあいだにじっさいの知覚と記憶――それがわれわれにとってもっとも関心のあるところとなるのであるが――のあることをいうことになるが、では、それはどのようにしてあるのだろうか。以下ではそのことを検討していってみたい。

2-1　記憶は知覚心象が転じて生ずる（知覚→記憶の運動）

ところで、「純粋な現在とは、未来を浸食する過去の捉えがたい前進」[36]あるいは「現在は〝そのようにしてあるもの〟と勝手に定義されているけれども、その実、現在はたんに〝生じつつあるもの〟にすぎない。もし現在を、過去を未来から分かつこの不可分な境界だと理解するならば、なにものも現在の瞬間ほど存在しないものはない。われわれが、あるべきものとしてこの現在を考えるとき、それはまだありはしない。また存在していると考えるとき、それはすでに過ぎ去っている」[37]というベルクソンのことばを待つまでもなく、現在は、つぎつぎと過去に転じてゆく。われわれの知覚心象は、まさに現在の知覚によって生ずるものであるが、現在は絶えず過去に浸食されるのであるのだから、知覚心象はそれが生ずるや否や、〝過去の〟知覚心象に転ずることになる。[38]つまり、知覚心象とは、つねにすでに記憶心象なのである。

このようにもいわれる、「第一の記憶力は、われわれの日々の生活のすべてのできごとを、それらが展開するにつれて、記憶心象の形で記録するだろう。それはいかなる些細なこともらさないだろう。ひとつひとつの事実や身振りに、その位置と日付を与えるであろう。有用性や実践的な適応といったような下心なしに、それはひたすら本性的な必然性によって、過去を蓄積するであろう」[39]と。知覚心象は、それが生ずれば、それがどんなに些細なものであっても、そのすべてが記憶心象に転じ蓄積されてゆくものなのだ。

しかも、そのように蓄積された記憶は決して失われない。われわれは、記憶喪失の症例をもって、記憶が失われることをいおうとするが、ベルクソンは、この考えを否定する。蓄積された記憶が失われるのではなく、いわゆる記憶喪失とは、そのような記憶を現実に結び付け、記憶心象

として立ち現わせる機構、つまり脳に障害が生じているにすぎないというのである。「脳とは、われわれの考えでは、一種の中央電話局にほかならない」[40]という、有名なことばが効いてくるのもここである。記憶はなくならない。「物質的対象は、わたしがそれらを知覚するのをやめれば存在しなくなると考えるのに理由がないのに劣らず、ひとたび知覚された過去が消滅する理由はない。」[41]

これらのことから、われわれが確認をしておきたいのはつぎのことだ。

ひとつは、先に渦巻きの譬えで現わした図式の有効性がなお堅持されるということである。表象としての知覚心象がどのように現われるのかは、まだ明らかではないが、理論上は純粋知覚として設定された運動の平面上のイマージュ――宇宙がその総体であるような物質そのものがイマージュといわれる――が、運動の滞りによって、表象としてのイマージュに転ずる。これが知覚心象である。この知覚心象は、この運動の滞りの点、われわれが譬えたその渦巻きへと吸い込まれてゆく。われわれに関わるいっさいの知覚心象が、細大もらさず、ここに吸い込まれてゆくし、そのように吸い込まれた知覚心象は失われることなく、いわばひとつの渦巻きそのものをなしてゆくことになるだろう。これがまず、いまみたことから確認できる第一のことである。

さらに、このように吸い込まれたイマージュ・知覚心象は、ひとつの渦巻きそのものをなし、それがわれわれの意識の、あるいは人格の根拠になるということは本論1-2でみたとおりである。加えて、いまわれわれがみたところでは、知覚心象とは、生じたとたんに記憶となるのだということであるから、この記憶の蓄積されたもの、〝記憶の総体 le totalité des souvenirs〟こそが、まさにわれわれの意識、われわれの人格の根拠であるということがいえるようになったというべきであろう。

これらの確認に加え、もう二点、留意しておきたいことがある。

まずひとつは、われわれの意識や人格の根拠が、この記憶の総体にあるとして、他方で、知覚心象はただちに記憶となって記憶の総体のうちに蓄積されるとするならば、われわれの意識や人格の根拠は、われわれが知覚する限り、つねに変化してゆくということである。本論では吟味しないが、[42]ベルクソンの思想のダイナミズムを忘れないために

も、後述する知覚⇄記憶の運動を理解するためにも、このことに注意を促しておくことは無駄なことではあるまい。われわれの意識、人格の根拠は記憶の総体にある。しかしこの記憶の総体というものはベルクソンのいうイマージュ、宇宙の運動の平面と連綿とつながっている[43]ものであり、宇宙と共に運動、生成変化しているといえるのである。

留意すべきことの第二点は、記憶の総体において〝純粋記憶〟が占める位置、あるいは〝純粋記憶〟と〝記憶心象〟との関連である。われわれは、記憶の総体をわれわれの意識、人格の根拠とみた。記憶の総体を構成する記憶が、まさに〝蓄えられてある状態〟のことをベルクソンは〝純粋記憶〟と呼ぶはずである。しかし、この純粋記憶の状態にある記憶は記憶心象とは異なる。「わたしの過去のうちで、ただつぎのようなものだけがイマージュになり、それゆえ少なくとも生じつつある感覚になる。つまりそれは、この行動に協力し、この態度のうちに位置づけられるもの、要するに有用たりうるものだけが、である。しかし過去は、イマージュとなるや否や、純粋記憶の状態を去って、わたしの現在のある部分とひとつになる。イマージュへと現実化された記憶は、それゆえ、純粋記憶とは根本的に違うものなのだ[44]」とベルクソンはいい、純粋記憶とイマージュとのあいだに、したがって純粋記憶と記憶心象とのあいだに、彼は明確な区分をつけるのだ。

彼が、このように明確な区分をつけるのは、記憶が喚起されていない場合、つまり記憶心象が立ち現われていない場合にも、記憶は失われていないという立場をとるためである。いったん獲得された記憶は失われることがない。そのことを保証するために、記憶心象の立ち現われとはいっさい関係のない状態、つまり〝純粋〟な状態としての〝純粋記憶〟の概念を持ち出す[45]のである。

しかし、ひとたび心象として立ち現われる前の記憶の状態を純粋記憶として想定したからには、この純粋記憶としての記憶が、心象としての記憶に転ずる次第を確認しておかなくてはならない。ベルクソンはそれに答えて、「ある記憶が意識に再び姿を見せるためには、その記憶は純粋記憶という高きところから、〝行動〟が達成されるまさにその点まで降りて来なくてはならない[46]」あるいは「記憶心象そのものは、純粋記憶の状態に還元されるなら、無力なままであるだろう。この記憶は潜在的であり、それを引き寄

せる知覚によらなくては現実的にはなりえない[47]」という。記憶は、現実的行動、知覚によって無力ならざる記憶心象たりうるのである。

われわれはここに、もうひとつの――知覚心象は生ずるとただちに記憶として取り込まれ、記憶の総体を創造してゆくという働きかけとは別の――知覚から記憶への働きかけのあることをみることになるだろう。詳細はおって検討するが、この二者をあわせて知覚から記憶への働きかけがここにはあるとみておくことにしたい。

2-2　意識的知覚は記憶心象の投げかけ（記憶→知覚の運動）

本論ではまだ、どのようにして知覚心象が生ずるのかということについてのベルクソンの考えを明らかにしていなかった。

すでにみたとおり、作用・反作用の運動の平面に、その運動の滞りの点が生ずる。それがわれわれの身体、われわれにとっての運動の中心となってゆくのだが、そのわれわれの身体はただ、作用・反作用の運動を停滞させているだけではない。「わたしの身体は、受け取ったものの返し方をある程度選んでいるように思われる[48]。」それは返すべき反作用を選ぶために、即座の反作用を留保しているのである。ここに知覚が現われる。「この知覚は、物質から受けた興奮が引き続き必然的な反応を呈しなくなったまさにそのときに現われるのだ[49]。」それはイマージュそのものから表象としてのイマージュへの転換が成され、それゆえ、そこに知覚心象が生ずることを意味しているが、この転換は、けっしてあらたな、あるいは別個のものの出現というのではない。

「それら（周囲にあるイマージュ）は、それらを結びつける根本的に機械的な法則を根拠としてお互いに無関心であるので、それらの面と面すべてをいちどに相互的に表わし出し、これらの面はすべての要素的な部分のあいだで作用し反作用し、そしてそれらのうちのどれもが、それゆえ、意識的に知覚されも知覚することもないのである。反対に、それらがもし、なにがしかの部分で、反作用のある種の自発性とぶつかるならば、それらの作用はそれだけ減少させられ、それらの作用のこの減少こそ、まさしく、われわれがそれらについてもつ表象なのである。ものごとについてのわれわれの表象は、けっきょく、それらがわれわれ

の自由にぶつかって反射することから生ずる」[50]のであって、それはあくまでも減少に起因することなのである。ここでいう〝作用の減少〟というのは、まさに作用・反作用の必然的法則に基づいて返すべき反作用を、すっかり全部返すのではないということである。機械的作用をゆきすごさせて残ったもの、作用・反作用の必然的法則に基づいて返すべき反作用から現実的に返した作用を差し引いて残ったものが表象であり、それがまさに知覚としての表象、知覚心象だというのである。このような状態をこそ、機械的作用ならざることから、彼は〝不確定性〟というだろう。つまり「われわれのいうところの〝不確定の諸地帯〟というのは、いわばフィルターの役をしている。それらはそこにあるものになにものも付け加えない。それはただ、現実的作用をゆきすごさせて、潜在的作用をとどめるだけだ」[51]と彼はいうのである。

しかし、われわれは、ただそれが現実的な作用ではない、ただやり過ごしただけだと読んではいけないのだろう。ここで明らかなように、この不確定性とはつまりは潜在性であって、いまだ現実にならざるというだけのことなのである。いつかは、この作用をなにがしかのかたちで返してやらなくてはならない、ただその返し方を選択するための猶予が与えられているというのが、ここでいう〝不確定性〟であり〝潜在性〟にほかならない。だからこそ、「わたしの身体は、受け取ったものの返し方をある程度選んでいるように思われ」[52]、「知覚の広さは後続する行動の不確定性の正確な尺度をなすことが肯定される」[53]といわれうるのである。

表象、つまり意識的な知覚というものは、現実的、機械的作用・反作用の運動の滞りというだけではなくて、そこに将来への可能性を秘めていなくてはならないということなのだ。現実化可能なにがしかを秘めているということ、そのことはベルクソンによってつぎのようにいわれる。「しかしわたしは、わたしの身体と呼ぶイマージュの役割が、他のイマージュに現実的影響を及ぼし、それゆえ物質的に可能ないくつかの進路のなかから決定を下すものであると考えた。そして、この進路は、おそらく、多かれ少なかれ身体が周囲のイマージュから得ることのできる有益性によって示唆されるのだから、これらのイマージュは、なにがしかの方法によって、それらがわたしの身体に向けるその側面に、わたしの身体がそれらから得ることが

できそうな方針を描き出していなければならない[54]」、あるいは「運動へと展開しない知覚はない[55]」と。つまり知覚心象は、差し迫ったものではないにせよ、現実的な作用を射程に置いたものであらねばならないし、知覚心象そのもののうちに、その可能性が描き出されていなくてはならないものなのである。では、このような可能性はどのようにして描き出されるのであろうか。ここで問題になってくるのが記憶の役割なのである。記憶こそが知覚心象の成立そのものに関わってくるだろう。

記憶の役割についてベルクソンは、「たとえこの身体が、刺激を受け取り、そしてこれを予見不可能な反作用へと練り上げることを目的にしていたとしても、反作用の選択は偶然的に働くべきものではない。この選択は疑いもなく、過去の経験から着想を得るのであり、反作用は、類似した諸状況がその背後に残すことのできた記憶に訴えることなしにはなされない。達成されるべき活動の不確定性は、だから、たんなる気紛れと混同されないためにも、知覚されるイマージュの保存をぜひとも必要とする[56]」という。現実の機械的反作用の留保によって生ずる意識的知覚は、あくまでも留保であり、現実化されうる可能性を秘めていなくてはならない。そしてこの可能性がなにによって保証されるかといえば、それはまさしく過去の経験であり、そのような過去の経験、類似の記憶心象がこれらの可能性として表象のうちに立ち現われていなくてはならないということである。そのために過去のイマージュ、記憶は保存されていなければならない。「なぜならそれらが存続するのは、ただ役に立つためなのである[57]。」では、このように〝役にたつため〟保存されている過去のイマージュは、どのようにして現在の知覚〝に〟立ち現われるのであろうか。

いや、ベルクソンは、現在の知覚心象がまずそこにあって、そこに過去の記憶心象が、付加的に忍び込むというような構図は考えない。彼は、現在の知覚心象そのものが過去の記憶心象によって成立すると考えるのだ。記憶心象が知覚心象に転ずるのだ。

しかし、もちろん「判明な知覚は、一方で求心的で外部の対象からくるもの、他方で遠心的でわれわれのいうところの〝純粋記憶〟を出発点とする逆方向の二つの流れによって引き起こされるのではないのか。……この二つの流れは結び付けられ、それらが合流する点において、判明な、再認された知覚をかたちづくるのである[58]」というように、

知覚がすべて記憶心象に起因するのではない。それはどういうことなのか。そのあたりを検証しつつ、記憶心象からの意識的な知覚の成り立ちをみてみよう。

すでにみたように「純粋な現在とは、未来を浸食する過去の捉えがたい前進[59]」なのだから、過去の記憶は絶えず現在にあふれ出てくるといえるだろう。そのあふれ方に取り止めのないひとが〝夢みるひと〟である。「過去に生きる喜びのために過去に生きるひと、あるいは実際の状況にとってなんの利するところなく意識の光のもとへと記憶が浮かんでくるひとも、同じく行動に適していない。このひとは衝動のひとではなく〝夢みるひと〟である。[60]」　つぎつぎあふれ出てくる記憶が、なにがしか現実と関わらなければ、それは夢にすぎない。[61]判明な知覚はその点において夢と異なるのである。

ではどのように現実と関わるのだろうか。「原則的に、現在は過去を排除する。しかし他方で、過去のイマージュの排除はまさに現在の態度による抑制によるのだから、そのかたちがこの現在の態度に枠取られうるようなイマージュは、他のイマージュほど大きな障害には出会わないだろう。それゆえもし、過去のイマージュのうち、どれかがこの障害を突破できるとすれば、それは現在の知覚に類似しているイマージュだ。[62]」　あふれ出てくる記憶を、現在の知覚との類似性が、制御し、現在に立ち現われることを許すのだ。

いや、この表現も正しくないかもしれない。「再認が注意的である場合、つまり記憶心象が規則的に現在の知覚と結びつく場合、知覚が機械的に記憶の出現を決定するのか。それとも記憶が自然発生的に知覚の面前に姿を現わすのだろうか。……第二の仮説こそわれわれの仮説となる。[63]」われわれが注意すべきは、あふれ出る記憶を制御するものが現在の知覚だからといって、記憶があふれ出てくる前にこの現在の知覚があることをあまりに強調しすぎてはいけないのだ。われわれはあらためて「純粋な現在とは、未来を浸食する過去の捉えがたい前進[64]」なり「現在は〝そのようにしてあるもの〟と勝手に定義されているけれども、その実、現在はたんに〝生じつつあるもの〟にすぎない。……われわれが、あるべきものとしてこの現在を考えるとき、それはまだありはしない。また存在していると考えるとき、それはすでに過ぎ去っている[65]」なり、あるいは「判明な知覚は、一方で求心的で外部の対象からくるもの、他

方で遠心的でわれわれのいうところの〝純粋記憶〟を出発点とする逆方向の二つの流れによって引き起こされるのではないのか。……この二つの流れは結び付けられ、それらが合流する点において、判明な、再認された知覚をかたちづくるのである[66]」という彼の立場を思い出しておこう。現在ないし現在の知覚はそれとしてあるのではない。たしかにそれは、記憶があふれ出るのを制御するが、それは記憶があふれ出るのを制御しつつ自らを生じさせていると考えるべきなのだ。いや、さらにいえば、あふれ出る記憶を制御することそのことがまさに現在の知覚、現在の意識的な知覚を生じさせていることにほかならないと考えるべきなのではないのか。

われわれはこれを理解するために、再びベルクソンの譬えとは別に、無色透明の〝輪郭〟があり、そこに幾度となく淡い絵の具が吹きかけられてゆく様子を思い浮かべておこう。輪郭の凹凸をもって単色で地塗りのされたキャンバスに、薄く溶いた絵の具をかけてゆくと、出っ張ったところに塗られた絵の具は流れてゆくが、窪んだところにはその薄く溶かれた絵の具が徐々に溜まり重なってゆくであろう。そのようにして、たんに絵の具の凹凸として輪郭がつけられて描かれていたものは、その凹凸に応じて濃淡の彩色がなされてゆくことになって、やがてくっきりとその姿を表わし出してゆくようになるだろう。われわれは、そのような様子を思い浮かべればよいのではないだろうか。もちろん、ここでいう無色透明な〝輪郭〟とは外部の対象の側からくるなにがしかのものであり、塗りかけられる絵の具とは、まさにあふれ出る記憶心象にほかならない。現前する対象とあふれ出る記憶心象との関係は、そのようなものであると考えられはしないだろうか。

「しかしそうなると、判明な知覚のメカニズムというものを、ふつうそうするのとは違ったふうに思い描かなくてはならない。知覚は、たんに、拾い集められたり、精神によって練り上げられた印象からなるのではない。……そうではなくて、あらゆる注意的知覚は、語源的な意味において、真に〝反射〟を前提とするのだ。すなわち能動的に創造され、対象と同一であるかあるいは類似のイマージュを、そして、その輪郭にあわせて作られにやってくるイマージュを外へと投げ出すことが前提となっているのだ[67]」、あるいは「もし、引き留められあるいは思い出されるイマージュが、知覚されるイマージュの細部を覆い尽くすまで

にいたらなければ[68]……」であるとか、あるいはさらに「あるエスキースがわれわれには与えられ、われわれは、その細部や色を、多かれ少なかれ遠い記憶をそこに投射することによって再創造するのである[69]」といわれるところはすべて、意識的な知覚が――現実の対象にある程度拘束されるものであるにせよ――過去の記憶心象による再創造であることをいっているといえるだろう。ベルクソンはそれゆえ、つぎのように念を押す、「たとえ瞬間的なものであっても、諸君の知覚というものは数えきれないほど無数の思い出された要素からなっているのであって、ほんとうのことをいえば、あらゆる知覚はすでに記憶力なのだ。純粋な現在とは、未来を浸食する過去の捉えがたい前進なのだから、〝われわれは実際上、過去をしか知覚しえない[70]〟」と。

ここまでわれわれが見てきたことは、われわれの知覚には、われわれの記憶が大きく作用しているということである。知覚と記憶とは別ものではない。むしろ記憶こそがわれわれの知覚を生じさせているということなのである。

2-3　知覚⇅記憶の運動

さて、われわれがここまでみてきたことは、過去の現在への絶え間ない浸食のゆえに、知覚心象はつねに記憶に転じるのだし、また純粋記憶は知覚によってようやく記憶心象たりうるということから、記憶は知覚によって作られるといえるだろうということと、知覚心象は、あふれ出た記憶心象が対象に反射することによって、つまり知覚心象は記憶心象による再創造というかたちで生ずるのだということである。単純化していえば、

(1)　記憶心象は知覚心象によって生ずる。

(2)　知覚心象は記憶心象によって生ずる。

ということになるから、ここには相互循環的な関係があるということができよう。ベルクソンが「かくして、われわれは絶え間なく創造し再構成する。われわれの判明な知覚は、まさに閉じた円環に似通っていて、そこでは精神へと導かれる知覚心象と、空間へと投げ出される記憶心象とが、追いつ追われつして走る[71]」というのも、基本的には、まさにこの知覚⇅記憶の循環運動を示しているといえるだろう。

ただし、われわれはこの引用に、わずかながらの違和感を感じずにはいられない。というのも、片や〝再創造する〟といいながら、他方で〝閉じた円環に似通って〟といわれるからである。〝再〟創造であれ、創造である以上、それはあらたなものの立ち現われを意味しているだろう。しかもおそらく、ベルクソンの思想の根幹をなすのは、ひとときも停滞しない生成変化、つねにあらたな創造であるはずであろうから、その意味でも、彼の思想において、彼の思想の根幹に関わる運動は開かれていなくてはならないはずだと考えられるからだ。われわれはこの問題を多少考えておこう。

われわれは〝純粋知覚〟が〝理論上〟設定されなくてはならなかったわけを思い出しておきたい。ベルクソンの理論においてはすべてが変化している。われわれにそれを一気に捉えることができないのなら、われわれはある側面をいったん――〝理論上〟――固定して見る必要があるだろう。〝純粋知覚〟が理論上設定されたのはそのためであった。ここでも同様のことがいえるのではないのか。ベルクソンが「純粋な現在とは、未来を浸食する過去の捉えがたい前進」[72]と考えていることは繰り返し見てきたし、彼の思想の全体構造からしても、記憶の総体がけっして生成変化することなく、それゆえ彼が〝閉じた〟運動をしていると考えていたとは思えない。けれども、ここで彼があえて〝閉じた円環にも似通った〟運動とそれをいうのは、まさに、われわれの理解の一助としての操作であるからにほかなるまい。彼は、生成変化する記憶の総体をいったん固定させ、その上で、つぎなる問題への展開を図ろうとしているのではないのだろうか。その問題とは、まさに記憶の現実化ということである。

知覚心象は記憶心象によって創造される。この知覚心象は生ずるとただちに記憶に転じ、記憶の総体を構成してゆくから、だから記憶も、それから成り立つ記憶の総体もこの知覚心象によって創造されることになる。そして、このあらたに創造された記憶の総体から記憶心象があふれ出てくることによって、またあらたな知覚心象が創造される。この創造は、あくまで反復ではなく、あらたなものの創造である。つまり、この知覚⇄記憶の相互循環運動は、たえざる創造の運動、開かれた運動であるといえる。まず、これを大きな構造として考えておこう。ベルクソンもこのことは否定しまい。ただ、ベルクソンはいったんこの大きな

構造を括弧にいれてしまうのだ。それは、この相互に循環し、すべてが絶えず変化するこの運動において、知覚心象が記憶心象によって創造されるというまさにそのプロセスを、より詳細に検討し、あるいはそこから意識の問題を引き出すために、いったん、この大きな運動を理論上、この運動を〝閉じた円環〟として固定しなくてはならなかったからだ。このように、これをベルクソンの操作と見て、われわれはとりあえず、この〝閉じた〟といういい方に執着するのはやめよう。

われわれはそれゆえ、ベルクソンの思想の根幹に、われわれがここまでで結論した知覚⇅記憶の循環運動のあることを確信しておくことにしたい。

3　結　語

われわれは本論において、ベルクソンの『物質と記憶』における知覚の概念のいくつかの特徴を見てきた。それは、純粋知覚の平面からわれわれの人格がたち現われるということであり、われわれの人格は、この純粋知覚に起源をもち、取って返されるべきでありながら留保されることによって残る知覚心象に基盤をもつということ、過ぎ去った知覚心象はすでに記憶であり、したがって、この記憶ないし記憶心象の総体がわれわれの人格を構成するものであると換言できるだろうということ、さらに、この記憶と知覚とのあいだには循環運動があるのだということであった。

ここまでを確認した上で、われわれは、そもそもの問題意識の解明に向かわなくてはならない。つまり、『変化の知覚』のなかで提示され、そして画家のそれがそうであるという、〝自然が行動の能力に結び付け忘れた〟知覚の能力が、いったいいかなるものであるのかということの解明である。この問題については、別に書かれる画家の知覚をめぐっての論文においての検討を図りたい。この後続する論文においては、まず、ベルクソンがここで提起している記憶の現実化という問題に論を進めてゆきたいと思うが、最後に、念のため、もうひとつだけ引用をしておこう。「ある記憶が意識に再び姿を見せるためには、その記憶は純粋記憶という高きところから、〝行動〟が達成されるまさにその点まで降りて来なくてはならない。いいかえれば、記憶の応答する呼びかけが発するのは、まさに現在な

のであり、記憶に生気を与える熱気を取り入れるのは、まさに現在の行動の感覚＝運動的諸要素からなのである。[23]」

註

引用は(Quadrige / P. U. F. 版)／(P. U. F. 全集版)として表記（例：PM 150/1371）し、テクスト及び略号は以下による。講演であるところの『変化の知覚』は「ですます調」で訳した。また引用文中の（ ）及び……は引用者による。

Essai sur les données immédiates de la conscience, Quadrige / PUF, 1927(3e éd., 1988)＝DI

Matière et mémoire, Quadrige / PUF, 1939(4e éd., 1993)＝MM

L'évolution créatrice, Quadrige / PUF, 1941(156e éd., 1986)＝EC

Les deux sources de la morale et la religion, Quadrige / PUF, 1932(3e éd., 1988)＝MR

Le rire, Quadrige / PUF, 1900(401e éd., 1985)＝R

La pensée et le mouvant, Quadrige / PUF, 1934(93e éd., 1987)＝PM

ŒUVRES, 1959, PUF(5e éd., 1991)

（1）「0　問題の所在」において述べるように、われわれが解明を目指すのは、いわば〝画家の知覚〟である。しかし、そのように、とくに際だたせられる知覚を検討する以前に、より一般的な知覚についての検討がなされなくてはならない。この、より一般的な知覚をさして、ここでは〝われわれの知覚〟という表現を用いることにしよう。この画家の知覚がいかなるものであるのかについては、別に書かれる論文で検討する。

（2）PM 150/1371

（3）PM 150/1371

（4）PM 152/1373

（5）MM 74-5/218

（6）MM 12/170

（7）MM 1/161

（8）MM 35/187

（9）MM 34/187

（10）MM 35/187-8

（11）MM 59/206

（12）MM 32/185

（13）われわれは、これを〝触感 l'image tactile〟と呼ぶことにしたい。

(14) 本稿では触感については特に触れないが、本稿は別に書かれる「芸術における触感」の基礎資料としても目論みられているし、味覚についても遠からず検討することを念頭に置いている。味覚についての最初の試論は「味覚的芸術の可能性——美学的試論」(『成城文藝』第一五六号)で試みられている。

(15) MM 57-58/205

(16) MM 251/356

(17) MM 72/216-7

(18) MM 31/184-5

(19) MM 38/190

(20) 「もし第一のことば(物質そのもの)よりも第二のことば(意識的知覚)の方により多くのものがあるのだとすれば、あるいは、現存から表象へ移るために、なにかを付け加えなければならないのだとすれば、この隔たりは越えがたく、物質から表象への移行は不可能な神秘に包まれたままだろう。もし、第一のことばから第二のことばへ、減少という道を通って移ることができ、またもし、イマージュの表象が単なるその現前よりもより少ないものであるとすれば、事情はおなじではない。なぜなら、この場合は現前するイマージュがそれ自身のなにものかを捨てることを強いられるだけで、イマージュの単なる現前がイマージュを表象に変えるのにじゅうぶんだからである。」 MM 32/185-6

(21) ベルクソンは、生命の進化を不確定性の増大だと考え、また、これが精神の自由をもたらすと考える。「生命の特徴をなす不確定性の中心 des centres d'indétermination, caractéristiques de la vie」(MM 65-6/211)「もし動物の系列の隅から隅まで、神経の体系が、行動が、次第に必然的でなくなるように構成されているとすれば……」(MM 27/181) ただし、後述の註も参照。

(22) MM 29/183

(23) たとえば「知覚がますますゆたかになるということ自体、生物の事物に対する行動において、ただその選択へ委ねられる不確定の部分が増大することをあらわしているはずでなかろうか。ではこの不確定性を真の原則として、そこから、出発してみよう」MM 27/181-2

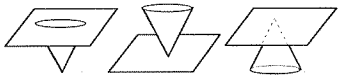
(24) このことは、後続して書かれる〝画家の知覚〟についての論文のその結論部で若干述べる予定である。たしかにここでいわれる純粋知覚の平面は、そもそも〝事実上は〟存在しないのだ。あとになれば、現在の一瞬の意識が照らし出す周囲の光景といいかえられるだろうが、いずれにせ

よ、〝事実上は〟この純粋知覚、作用・反作用必然の法則に基づく運動平面が、不確定性の中心に先だってあるのでもなく、また不確定性の中心が〝生ずる〟のでもない。論理の展開上、まず、この運動平面が想定されているにすぎないのだから、だから、不確定性の中心、運動の滞りが生ずる根拠を明言できないというのも当然といえば当然かもしれない。

(25) MM 27/181-2

(26) MM 27/182

(27) ただし、通常、渦巻きは深遠にゆくにしたがって先細ってゆく（下図左端）が、ベルクソンのいわゆる逆円錐の図（下図中央）（MM 169/293）を考慮にいれ、なおかつ運動の平面上のイマージュが引き込まれるのをイメージするなら、むしろ、これは逆に、この平面を頂点とした円錐（下図右端）でなくてはならない。ただし、ここでは運動の中心の成立過程を思い描きたいと考えているので、渦巻き（左端）を思い描けばじゅうぶんだろう。



(28) たとえば「生は、その起源からただひとつの継起なのであり、さまざまな進化の線に分かたれる、唯一で同じエランなのである」（EC 53/540）。『創造的進化』においてのみならず、宇宙全体が持続し、われわれもまたその全体の持続との不可分の関係において持続をしているとのベルクソンの思想は、その著作のいたるところでみることができるだろう。

(29) この関係性は、理論上は純粋知覚と純粋記憶を、事実上においては現実的行動と記憶を結び付ける関係性である。

(30) MM 46/196

(31) MM 171/292

(32) 生じて過ぎ去り過去のものになった知覚心象はその限りで過去の心象、つまり記憶〝心象〟といいうるだろうが、しかし、あとになってより鮮明に論じなくてはならないように、蓄えられた後に〝立ち現われた〟過去の知覚心象をこそ記憶心象と呼ぶべきだろう。それゆえ、以下では、過ぎ去ったばかりの知覚心象については、これを原則として――心象たりうる可能性は否定せずに――たんに〝記憶〟と呼ぶことにしたい。

(33) MM 46/196

(34) MM 62-63/209　ここではまだ、記憶の側からの働きかけを問題にしていない。

(35) MM 72/216-7

(36) MM 167/291

(37) MM 166/291

(38) 以下の引用との関係から、ここでは、記憶との表記の区分の原則を破る。

(39) MM 86/227

(40) MM 26/180 たしかに、記憶喪失であったひとが記憶を取り戻すということを考えれば、ベルクソンの考えは説得力がある。

(41) MM 157/284

(42) 本論をもとに書かれる予定の「芸術における触感」においては重要な意味をなす。

(43) われわれが先にみた運動の平面は、まさにそれが現実の運動の場である。運動の作用・反作用は感覚というかたちではたらくだろう。一方で、記憶は運動の留保である。ベルクソンが現実的な感覚と記憶あるいは知覚を本性的に区分しなくてはならないと主張する（たとえば MM 154/281-2, MM 56/204）のは、まさにそれが片や現実的であり、他方、潜在的ないしは可能的であるというまさにその差異の故である。このことは以下に論ずる純粋記憶の問題とも関連してくる。この区別は明確に意識していなくてはならない。しかし、それにも関わらずここで運動の平面とこの記憶の総体とが連綿とつながっているとわたしがいうのは、この可能的状態も運動を目指すものであるという意味で、われわれの意識や人格の場としての記憶の総体もまた、この運動と密接に連動しているという側面を強調したいがためである。

(44) MM 156/282-3

(45) 純粋知覚が、ひたすら理論上想定されたのに対し、純粋記憶は、必ずしも理論上に限定されない、いやむしろわれわれは事実としてその実在を信じなくてはならないのだろう。われわれにとって記憶心象でない状態の記憶はないも同じであり、それゆえ、一見、この純粋記憶も理論上想定されたものであると考えたくもなるが、そうではない。純粋記憶を事実上存在しないなどといったらベルクソンによって批判されることになるだろう。

(46) MM 170/293

(47) MM 142/272

(48) MM 14/171

(49) MM 27/182

(50) MM 34/187

(51) MM 36/188

(52) MM 14/171

(53) MM 29/183
(54) MM 15/172
(55) MM 101/239-40
(56) MM 67/212-3　なお若干補足すれば、ここで予見不可能といわれるのは、その反作用が機械的ならざるということを意味するのであり、過去の類似の経験によって着想がえられることをもって、予見不可能ではないと批判するのは的外れである。
(57) MM 68/213
(58) MM 142/272
(59) MM 167/291
(60) MM 170/294
(61) 現実とまったく関わらないというのではないはずであることは、後続して書かれる論文において検討する予定である。
(62) MM 103-4/241-2
(63) MM 107-8/244-5
(64) MM 167/291
(65) MM 166/291
(66) MM 142/272
(67) MM 112/248
(68) MM 111/247
(69) MM 117/252
(70) MM 167/291
(71) MM 113/249
(72) MM 167/291
(73) MM 170/293